
神話

きぬは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神話

【Zマーク】

Z7602H

【作者名】

きぬは

【あらすじ】

【東方二次創作】神奈子と諏訪子のお話

(前書き)

「一次創作」といふことを「理解ください」。

雨上がり。

屋根にたまつた水滴が、零となつて水溜りにポツリと落ちる。

波紋は広がり、一つの大きな円を描く。

「それじゃあ、いつてきます神奈子様、諏訪子様」

冬の澄み切つた空の下、玄関先で白い息が漏れる。

「あ～、いつてらっしゃい……」

腕を組むわけではないが、まだ肌寒い気候のせいか両手をもう片方の袖に

隠しながら、眠そうな声で挨拶を返す神奈子。

「いらっしゃい

一方、まさか千年以上生きているとは思えないほど、無垢な笑顔で大きく手を振る諏訪子。

一人の視界から早苗はどんどん小さくなつていき、やがて見えなくなる。

早苗の姿が見えなくなるや否や

神奈子は寒さを運ぶ玄関を閉め、冬眠から無理矢理起された蛇の「」とく

視線を送る。

「で、今日は早苗、『』に行つたんだい？」

「聞いてなかつたの？」

「ああ」

そう頭をかきながら神奈子は茶の間に足を運び、コタツへと潜り込む。

諏訪子の方はお茶を入れるため台所へと向かいながら、神奈子のフランクさに

あきれた口調で答える。

「確か……今日はあの黑白ど、幻想郷を探検するとか言ってたかな」

「へえ~」

一向にやる気のない返事。

季節が違えば五月病といったところなのだろうか。少々その態度にムカつきながらも、

諏訪子は尋ねる。

「一度寝するの？」

「いや、今日は起きるわ」

田は冬眠から無理矢理起された蛇そのものなの、瞼が瞳に暗幕を張っているのに、バフやアヒルが起きたひっこ。

「つてことで私のお茶もお願ひね」

神奈子はそう自分の意見だけ述べると、答えも聞かずにコタツに身を預けるようにして

だれこむのだつた。

一方、諏訪子はそんならしない神奈子を横田に準備を始める。

湯気の上がったヤカンをお茶葉の入った急須に注ぐ。

茶葉が一斉に広がり、仄かにお茶の香りが漂う。

そこから一人分の湯のみに注ぐ。本當なら半分注いで、もつ片方に半分注いで

それからもう一度、注ぐのだが、氣の知れた者同士なのでその手前は省き、

ただただ、8分皿まで注ぎ、それが終るともう一つの湯のみに8分皿まで注ぐ。

冬にはもってこいの熱いお茶の出来上がりだ。

諏訪子はその小さな両手に一つの湯のみを抱えながら

「はいっ」

とちやぶ台にガツンと置く。

もう一人の神はお茶を受け取ると、お礼も言わず、お茶も駿らず、早々、コタツへ深々ともぐり込む。

諏訪子もそれにつられてか、一歩遅れて同じ動作を繰り返す。

いつもは三人の守矢神社、でも今日は一人。

早苗がいるときは、いつも取り合ひのよい、蛇と蛙の熱き死闘を繰り広げる一人も

早苗がいなければ、別に争う理由も無い。

もつ国取り合戦も当の昔に終わつたのだから。

つかの間の静寂が守矢家に訪れる。

しかし、こままではお話が成り立たない。

そんな静寂を破つたのは、夏からつけっぱなしの風鈴。

「冬でもいい音が鳴るんだね」

「へえ～そ‘うなのか～」

神奈子のやる氣のないといづつは聞く氣のない態度に頬を膨らませる諏訪子。

しかしそんなことにいちいち腹を立てるわけにもいかないので、気分転換にお茶を啜る。

それでも自分の田の前にいるのは、やる氣のない神様と彼女の湯のみ。

なかなかイライラが消え去らない。なるべく神奈子を見ないといづこ、彼女の湯のみを

見つめていると、そこには諏訪子にとっての大発見があった。

彼女は真ん丸、御眼田をもう一段階大きくして声を漏らす。

「あ～、神奈子のお茶、茶柱立てるじやん…？」

彼女の言つとおり、小さこながらも、茶渋がしつかりと湯のみの底に足をつけていた。

「これひてす、ここじだよな。神奈子……」

しかしそれに対しての返答はない。

神奈子を見ても、ただポカソーピーか遠くを見つめているだけだ。これに対して、ついに我慢していた何かが、諏訪子の中でブチンと弾けた。

「ねえ、その死んだ魚みたいな田やめてくれるかな？ 一応私たちは神様だよ」

それでもそんな彼女にほとんどの興味を示すことなく

やつとお茶を啜り、静かに、いやせいかと云つてやる気がなさそうに神奈子は答える。

「そうかもね」

言葉は皿、同様死んでいる。

「あんたが、神様とか言つの珍しいじやん？ 普段は私がいっそうなのに」

「確かにそうだけど……それでも今のあんた見てるとこちこままで、その死人オーラが

「うつつかつで嫌なの……」

「わいやあ、わるいわんした」

神奈子は体からだ、むらこ力を抜くよつて、下半身のみならず、上半身も畳に預ける。

諏訪子からは怒る依然に、普段とは打って變った神にて、もはや溜息混じりの声しか出ない。

「で……原因は早苗でしょ？」

神奈子の背筋がピクンと脈を打つ。効果音がつくなら「ギクッ」が適當だわつ。

「やへね」

「まかしてもだめ。早苗が私たち以外の子と遊びに出かけるといつも

そうなるもん……」

神奈子はその質問に答えることなく、目を瞑るだけ。

やがて、彼女からはスースーと心地のよせわづな寝息が聞こえ出す。

その間、諏訪子は彼女を起しきすのも面倒なので、ちやぶ台に置いてあつた蜜柑に

手をつけるのだった。

神奈子が寝てから何時間が経ったのだろ。

とつあえず、蜜柑のヒドリ型の皮が五枚ほど、いやふくらひ並ぶ頃

神奈子の皿がパツと開いた。唐突の質問とともに。

「ねえ諭訪子、あなたは……早苗の『さむらいの妻』へ。

「起きたんだ。やつこひ神奈子せどりの妻」へ。

「句を早々に」と思いつつも

悪戯そつな皿つをぐれま質問を質問で返す。

決して先ほどの愚弄の数々を忘れたといつわけではなつだ。

「で、神奈子さんせどりの妻ですか？」

諭訪子はわざと質問を繰り返す。

神奈子は質問しているのは自分なのと思しながら、仕方なぞつにしふしふ答える。

「私は……正直なところ……自分でもわからないんだ」

「え? こいつとゆく?」

諭訪子は興味深そうに、寝転がる神奈子の顔を覗き込む。

神奈子は皿を呑ませよつとせざ、背を諭訪子に向けるよつて寝返

つかつ。

「とにかく、早苗がいなくなると怖くなるんだよ」

その声は風鈴の音にもかき消されそつた程小さかつた。

しかし、その一言は諏訪子の田を輝かせるのだった。

「それは恋つてやつだよ……恋に違いない……」

神奈子は起き上がり、明らかに侮蔑まじり、理解不能といった田つきで田の前の諏訪子を捉える。

「なんですぐやうなるのかな。それに早苗は私専用の巫女で、私は神なんだから……」

「恋とかは」「法度だろ」

そんな彼女に鋭い口調が突き刺す。

「だから……恋はあつえないつてこうの?..」

「ああ、私と早苗の関係は祭るものと、祭られるもの。結ばれちやいけないだろ」

「誰が決めたの?..」

「いや……」

神奈子の言葉が詰まる。

「それは逃げだよね。自分が神様つてことを言って訳にしてしまか
してるだけだよねーー！」

そつ言葉を吐き捨てながら、諏訪子はちやぶ台を思い切り叩く。

それについては何か思つ」とがあつたのか神奈子も体勢を整え、ち
やぶ台に足を乗せ、

「えうこうあんたはどうなんだよーーー！」

と鋭い視線で諏訪子を見下す。

しかし彼女がそんなことでも怯むわけもなく、言葉は神奈子のときと
は対象的に

すぐさま発せられる。

「私は好きだよ。早苗のことが大好きだよー 愛しているよー！」

一人の神が対峙する。その瞳は彼女たちが初めて対峙した戦争のと
きよりも

明らかに激しいものだった。なんでここまで問題が発展してしまつ
たかはわからない。

ただこじり、いつも止めてくれる早苗は今いない。

「へえ～あんたこそ、思いを伝えられないままじゃないかい？」

それでよく私に言い切れたねーー！」

神奈子は諏訪子の襟を軽々と掴み上げる。まるで蛇が蛙を食ひつつう。

神奈子の勢いはもう止められない。彼女自身もそう思った。

しかし次の瞬間、そんな血管も筋繊維も浮き上がる腕に

一滴の雫が流れる。まさしく諏訪子の涙、神奈子でさえ初めて見る
諏訪子の涙、

それは国を侵略するときにも流れることなかつた涙だった。

つい、握り締めた力が弱まる。

「あんた……」「

「わだじは……どんどん早苗がすきでも……血縁者だから、結ば
れちゃいけだいんだよ……」

諏訪子の言つよつこと、早苗は諏訪子の遠い子孫だ。血が薄れたから
といつても早苗の奇跡を起しきず

能力が今なお、強い血の絆を示す。そしてそれこそが、諏訪子と早
苗を結ばせない。

どんなに愛していようが、体の、心のどこかで罪悪が生まれる。そ
して罪悪はいつか

諏訪子を壊す。それは諏訪子の古くから生きてきた神としての経験が物語る。

神々は幾度となく血の絆で結ばれてきた人類の末路を見てきた。

それはとある小説家の妹であつたり、はたまた歴史上に名を残す貴族であつたりと

さまざまの人々。絆を乗り越えようし、もだえた誓句、壊れていった人々だ。

それを思ひと乗り越えられない。

神奈子は全て悟つたように、ゆつくりと諏訪子を置へとおろす。

諏訪子はよれよれになつた襟を手で叩き、涙を拭つてゐる。

その間、神奈子は早苗という子孫は諏訪子が洩矢の国を治めていた際に、彼女が愛した

人物と酷似していたのかもしないと思いながら、諏訪子を可哀想に見つめていた。

やがてだらだらと涙を流してた諏訪も涙を拭い終わる。

彼女はそこで神奈子を見つめ返す。

その健気そうな姿に、神奈子は何か励ましの言葉でもかけてやろうと口を開こうとした瞬間。

「で、神奈子はどうなの？」

諏訪子の唇が先に動いた。思つた以上にケロつとしているのに神奈子は

突つ込みを入れたくなつたが、彼女の瞳の真剣さと

諏訪子の切実な気持ちを知つてしまつたといつ思いから、素直に答えるを得ない。

「私は……本当にわからないんだ」

それは今までで一番ハキのない声だった。

そのとき神奈子は、また諏訪子の眼の他に、帽子さえも自分を睨み付けているように感じた。

それでも神奈子は言葉を続ける。自分に正直に語つてくれた諏訪子のために自分の気持ちを

理解してもらつたためにも。

「私は、神として生きてきた」

確かに神奈子は諏訪子とは異なり確かに子孫も残すことなく神という立場で生きてきた身だ。

「だから恋という感情がよくわからない。でも早苗が私から離れていくことがすこい怖いんだ。

それを人は恋というのかも知れない。でも……私の場合は少し違うと思つ

諏訪子の侮蔑の表情が少しばかり緩やかになる。

「私は人々の信仰を一度失った神だ。そんな中、私を生かし、支えとなつたのは言うまでも

ない早苗だ。だから……早苗もいつか他の人たちと同じように私の元を離れ、忘れてしまつんじゃ

ないかと思うと怖くて仕方ない。これが私の気持ちだ」

嘘偽りのない、一度人から見捨てられた神の気持ち。

「そつかあ。神奈子もつきり私と同じと思つてたんだけどなー」

ZUN幅を深くかぶりながら諏訪子はそう口にした。

そしてどこを見るでもなく、しいて言えばどこか遠くを見るようにして言葉を続けた。

「なら、安心だよ。早苗は絶対に忘れたりしない。それに神奈子も私もこれから

もつといつぱい楽しくなる」

神奈子の頭には「？」の一文字が浮かぶ。

諏訪子はそんな神奈子に満面の笑みをつくる。

「あいつと早苗が誰か、私たちじゃない例えばあの白黒を好きになつて結婚しても……」

早苗は「」で暮らす。そしたら、あの白黒も「」で住んで、4人暮らす。でもつて

年を重ねるにつれて、早苗はあの白黒の怪しき薬品とかで子供とかも生んじやつたりして

また、家族が増える。もちろん私や神奈子の自由な時間も減つていいく。なんか子供のおしめとか

世話とか押し付けられたりしてね。で、さうにこそ子が誰かと結婚して子供を生む。

その子はもう神社じやや「」だから別の家で暮らす。それでも暇な私たちは

呼び出され、何かひとの赤ちゃんの世話をしたりする。

なんたって私たちは神だから年もとらないしね。本当に毎日が忙しくなつていいくはずだよ。

でも、でも、それなのに私たちはどんどん幸せになつていくんだけ。早苗の幸せが私たちの

幸せにもなつて、その幸せは連鎖していくんだよ」と

「それじゃあ、諏訪子……あなたの恋路は……」

言ひつもりはなかつた。しかし氣づいたらそつ口にしていた。

「好きな人と結ばれることだけが幸せとは限らないんだよ。私は神として

多くの人間を見てきた。全ての人間が自分の一番好きな人と結ばれてこなかつたことも

見てきた。でも……そうじゃなくても、人は笑っていたでしょ。だから今日のことは

一人だけの秘密なのだー」

諏訪子は帽子をはずし、神奈子を安心させるよつこもつ一度大きな笑顔を見せた。

諏訪子は自國が侵略された際も毅然な態度を崩さなかつた。

侵略したは、いいが信仰を集められなく悩んでいた神奈子に

何も文句もたれることなく諏訪子は手をかしてくれた神もある。

だから。

「本当に強い子だね」

神奈子は遠い昔の出来事をそして今、この一瞬、一秒を思いながら、
そう小さく呟くのだった。

「今なんか言った？」

本当は聞こえていただろ？に、諏訪子はわざとじりじり頭を神奈子のKENESENな胸に擦り付ける。

「何でもないから、急にくつつくんじゃないよ」

「いいじゃん別に」

そんな一人のやり取りの最中、玄関が再び開く。

「ただいま戻りました。少し、遅くなつてしましましたね。申し訳ありません。

今から晩御飯の支度しますから」

その声の主はもちろん早苗。まだ外はつづすらうな赤紫で、そこまで暗くはないのに律儀な娘である。

その間も諏訪子は神奈子にじゅれつきっぱなし。早苗はそんな仲の良い一人を

微笑ましく思いながら、おかげに向かい夕食の準備を始める。

野菜が俎板の上で淡々とメロディを奏でだす。同時に早苗の口も動き出す。

「ところで、明日の夜、博麗神社で宴会を催すそつなんですけど……」

一人の手が不意に止まる。

「えうか……それなら、明日は楽しんできなよ、早苗」

どこのかぎりない声の神奈子の声だけが守矢家に響いた。

それで、早苗からの「あつがとうござります。明日も楽しんでおますね」で終わり。

少なくともさうだと神奈子は確信していた。

しかし

「何を言つてるんですか！？」「人も行くんですね！」

「へえ？」

「やつは～笛で樂しへお酒が飲めるつことだね」

疑問符を吐き出すのはやはり神奈子で、酒盛りに感嘆の声を漏らすのは諷訪子。

「だつて神奈子様も諷訪子様も、妖怪の山はよく知つても、まだ幻想郷の

妖精や吸血鬼さんには会つてませんよね。今回は私たちの親睦も兼

ねてるんで

「主役の一人がかけちゃいけません！！」

いつも以上に生真面目な早苗の表情。

神奈子からもつい笑みが漏れる。

「どうなさいなしたか？神奈子様？」

てっきり自分は幻想郷でも、いずれ早苗に見捨てられ、取り残されてしまう時が

やつてくるのかと心ビクで思った。そう昔、人々から信仰を失ったよう。

でもどうやら、それはまだまだ当分先、いやこないかもしない。

今は早苗とともに、いやこの幻想郷とともに歩んでいく道があるのかもしねえ。

今ならさつきの諭訪子の言葉の意味が少しわかる気がした。

幸せが連鎖する。それは雨上がり、

屋根にたまつた水滴が、零となつて水溜りに描かれる波紋に近いものかもしねえ。

そんなことを思い、縁側にまだ残つている水溜りに落ちる水滴を眺めながら神奈子は

「いや何でもないよ……」

とだけ穏やかな口調で答えるのだった。

(後書き)

話の展開、諏訪子と神奈子の設定が一応公式設定?の部分も考慮しながらやつたつもりですが

若干ムリやり感があつたような気がします。実はその1の前にのみ
たいのも書いて神奈子と諏訪子

の過去話を書いたには書いたんですが、諏訪子があまりにも悲しく
なつたし、あんまり個人の過去話を

押し付けるのもよくないのかな」として内容的に本編と矛盾と
いうか混乱を招く箇所に気づいたので

カットしました。まあそんなこんなです。早苗さんと、あんまり深
く言及してないのも別に手抜きではなかつ

たつしまある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7602h/>

神話

2010年10月28日05時12分発行